

雑司が谷研究 15

—— コミュニティカフェの交流を生み出す配置計画 ——

Zoshigaya Study 15: Table Layout of a Community Café as a “Third Place”

住居学科 高橋 和佳 葉袋 奈美子
Dept.of Housing and Architecture Nodoka Takahashi Namiko Minai

抄 録 近年地域コミュニティの希薄化が問題になっている。この問題解決のためには地域の人が自由に利用できる地域の人の憩いの場が必要であると考え。雑司が谷公園丘の上テラスは地域の人が高い頻度で繰り返し使うサードプレイスであり、学校、保育園、習い事などの知り合いによく合い、共に時間を過ごす場となっている。コミュニティをさらに促進させるためにはその設えも重要であると考え。交流を促すために長く滞在させることが効果的であり、滞在時間が長くなるような座席レイアウトを模索した。その結果テーブルを繋げ相席状態を作る、通路向きの席を増やすことが重要である。

キーワード：サードプレイス、地域コミュニティ、座席レイアウト、コミュニティカフェ、公園

Abstract Recently, people’s sense of local community and their perception of its importance has weakened. In order to solve this problem, we believe that a place for local people to relax that can be freely used by local residents is necessary. Zoshigaya Park Okanoue Terrace is a “third place” that is used frequently and repeatedly by local residents, where they often meet their neighbors and spend time together. This study discusses the best layout of tables and chairs in Okanoue Terrace café to promote more communication between users. We researched seating layouts that encourage people to stay longer in order to interact with each other more. The results of the study suggest that connecting tables to create a shared seating environment, and increasing the number of seats facing the aisles would be most effective.

Keywords: Third Place, Local Communities, Seating Layout, Community Café, Park

1 はじめに

近年、地域コミュニティの希薄化が問題になっている。近所の人と顔を合わせれば挨拶し、立ち話をし、近隣の子供と大人が顔見知りですれ違えば声を掛け合っていた。このようなコミュニティを形成していくためには、地域の人が集まれるコミュニティ形成の“憩いの場”があることが、必要であると考え。かつては、そういった場が道端や空き地といった場であり、地域の人々が自然に集まり、老若男女が同じ場にいることで、顔を覚え、会話が生まれる。

久隆¹で何か交流を目的としたイベントを題材に、交流の場の必要性がわかる。橋戸²ではNPOや自治

体などがイベントやコミュニティカフェを開かなくても、30年以上続く地域に根ざした喫茶店も自由なコミュニティの場であるとしている。青木・伊藤³、出口・横山・宮岸⁴、岩波・山田⁵などから、カフェなどの座席レイアウトによって利用状況が変わることがわかっている。しかし、長年続く喫茶店のように常連客が自然に自由に交流できるような場の必要性やコミュニティ促進の設えについてはまだ十分な検証は行われていない。

本研究ではそのような地域の憩いの場、コミュニティ形成を促進する設えを提案することを目的とする。

2 雑司が谷公園ひろばくらぶと丘の上テラス

本研究対象とする雑司が谷公園は2020年3月に旧高田小学校の跡地を再生した空間で、道を挟んで隣接していた既設の雑司が谷公園と一体化して運用されている。木造密集市街地の中央部にあり、防災の拠点としてのオープンスペースの確保と、防災倉庫を兼ねた準救援センター（豊島区における災害時の対応拠点）として利用されることを意識して、地域住民との意見交換を踏まえて計画された。開園後の運営にも、近隣町会長等から構成される公園運営協議会により運営されている。

芝生の広場の他、ボールひろばや水遊びひろば、遊具がある他、かまどベンチや深井戸などの防災設備もある。丘の上テラスはその雑司が谷公園の北部にある屋内施設である。大きな庇が特徴の建物であり、“まちの縁側”を象徴している。エントランスホールには机椅子の他、ロッカーや本棚があり、住民が自由にしようすることができる。厨房も併設されており、カフェを営業することもできる設備が整っている。その他、集会室、防音室、管理人室、トイレ、授乳室があるほか、非常食等を保管する備蓄倉庫やソーラーパネルが完備されている。(図1)

NPO法人雑司が谷ひろばくらぶは、公園の計画づくりを検討する参加者有志から創設されたNPOで、公園完成後は、区の公園管理担当者や公園運営協議会と連携をとり運営に協力している。災害時の利用苦に加え、公園来園者の交流の場となることを目的に設けられたキッチンを活用したカフェの運営についての提案と実行を依頼されている。公園は開園当初から新型コロナウイルスの対応が続き、限定的な飲料の販売しか実施できないでいるものの、図1内bに示されるような、椅子とテーブルのある空間は、公園利用者の憩いの空間として利用されている。なお屋内での飲食は禁止されているため、図1中b空間はカフェの一部というよりは、屋内の交流スペースとしての位置づけで利用されてきている。なお、本研究は、このNPOとの連携のもと実施した。

3 既存レイアウトの利用実態

6月2日(水)、6月27日(日)、7月14日(水)、7月25日(日)の4日間10:00~17:00に既存レイアウトでの利用状況を調査した。4日間の合計利用者数はの



- a 縁側
- b エントランスホール
- c 厨房
- d 防災公園としての機能の一部がある

図1 丘の上テラス図面

べ482人であり、平日は60人代、休日は100人或いは200人を超え、平日に比べ休日の方が、利用者数が多い。年齢については、調査者の判断により子ども（高校生以下と判断された人）、高齢者（概ね70歳以上に見える人）、大人（高齢者、子ども以外の成人と見える人）に分類を行った。高齢者の利用は平日休日あまり変化がない。大人の利用は曜日に大きく左右されており、休日の大人の利用は平日の倍以上となっている。平日は高齢者、子供の利用が中心だが、休日は子供、大人の利用が中心である。更に、各日の来場者の割合で見ると(図2)平日は高齢者の割合が高くなり、休日は子どもの割合が増える。割合のみで見ると大人の利用に平日も休日も大きな差がない。

時間帯(図3)別で見るとこれはどの日も大きな差がなく、14時以降に利用が増える。12時13時のランチタイムの利用が少ない。午前中は親子連れが多く、午後になると小学生の利用が増える。高齢者も午後から増えるケースが多い様子。いつも集まっている高齢者のコミュニティの方が午後に来集していることも大きく影響していると考えられる。

行動(図4)を見ると圧倒的に遊びの利用が多い。ついで会話が多く、コミュニケーションの場として成立している様子が確認できる。休憩、飲食、パソコン作業とそれぞれ思い思いに行動している様子が確認でき、地域の人が自由に使える場として定着している様子も確認できる。座席別(図5)に見ると一

番利用が多いのは丸テーブルである。子どもの利用が圧倒的に多い席である。ついで大人の利用も多く、付き添いの親が利用していると考えられる。ついで多いのはテラス席である。テラス席は飲食可能であるため、お弁当やおやつを食べるための利用が多い。また高齢者のみで見ると一番多く、高齢者とあるコミュニティのお決まりの場所となっており、いつも集まって利用している。その他、座席の利用方法にも特徴があった。こどもは座席を動かさず、机に集っている。椅子がたりなくても、持ってくることはあまりせず、たったまま利用するケースが多い。一方で大人は椅子を動かし、着席空間を確保した上でテーブルを利用する。つまり子どもが机に集うのに対し、大人は椅子のあるところ集っている。親子、子どもを中心に、本棚の利用が非常に多い。4日間で1度だけ、本棚の近くの席で、知り合いではない親子が会話をしているのを見た。高齢者は子どもがボール場で遊んでいる様子を眺めている人が多い他、通路むきに座る人が多い印象を得た。

4日間の平均利用内訳(図6)から改めて幅広い世代に利用されていることがわかる。全国街区公園利用者内訳と比較すると、子どもと高齢者の利用が多いことがわかる。全国的に公園が高齢者の溜まり場になりにくいのかかもしれないが、丘の上テラスでは高齢者の溜まり場となっている。全国街区公園利用者内訳と日本の人口内訳を踏まえた上で、4日間の利用者内訳と豊島区の人口内訳と比べると、多くの世代に利用されていると言えるだろう。大人世代の利用は少ないが、全国のコミュニティカフェ利用者の内訳と比較しても幅広い世代に利用されているサードプレイスである事がわかる。

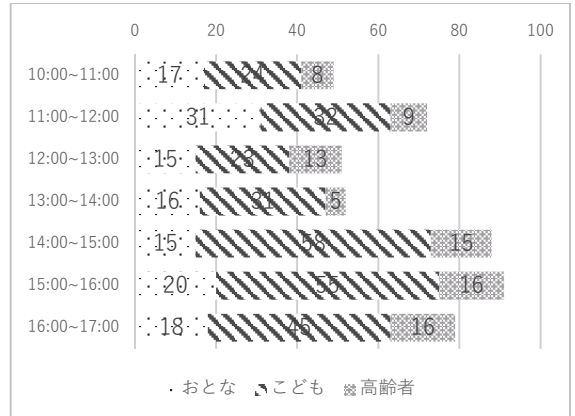


図3 4日間の時間帯別合計利用者数

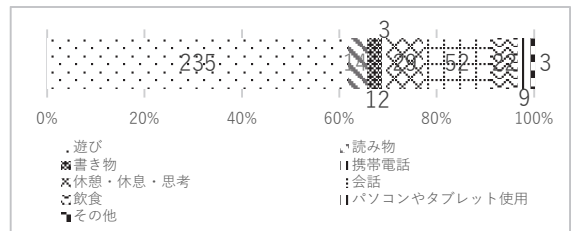


図4 4日間の合計利用者行動内訳

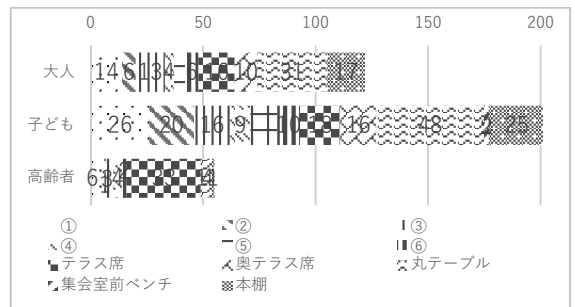


図5 4日間座席利用状況

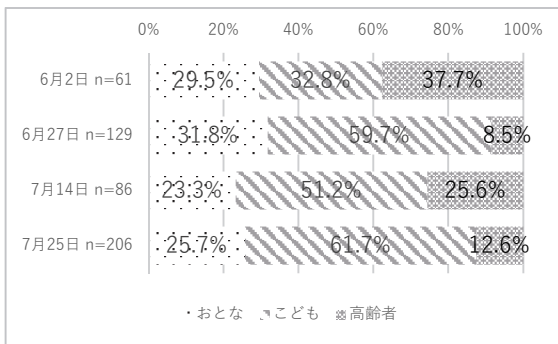


図2 4日間の利用者内訳

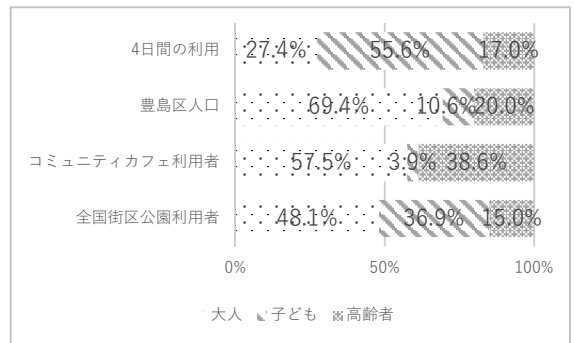


図6 4日間平均利用者内訳と比較

4 座席レイアウトによる利用者の変化

本章では4種類の座席レイアウトを実施し、観察調査から利用状況や交流の様子を分析し、丘の上テラスの使われ方やサードプレイスの必要性を検討する。調査は、夏休み期間を中心とした2021年8月11日から10月6日で、レイアウト2週間ごとに変更を行うこととして、来場者の観察調査は合計17日各13時から17時の4時間行った。

レイアウトは図7に示す4種類で行う。座席レイアウトについては、通りがかった人との交流の生まれやすさを意識して着座場所が通路に向けた席を増やすこと、テーブルを集めるタイプ離すタイプとの2つの視点の組みあわせによるものである。なお、新型コロナウイルスへの対応の求められる期間であったため、その点についての配慮も踏まえた提案を行った。

世代別の利用者の結果は、6月に実施した既設の配置の調査時と比べると夏休み期間を含んだこともあり、子どもの割合が多い(図8)。子どもは曜日に関係なく利用が一番多い(図9)。天気が悪いと人数は減るものの、割合から考えると雨の日でも利用する子が多いことがわかる(図10)。カフェ空間内で知り合いに出会っている様子や公園で待ち合わせをしている様子も頻繁に見かけた。その日遊べる子が公園に集合して遊んでいる様子も見られた。放課後に気軽に集まる場所、いわばサードプレイスとなっている。

曜日別に見ると平日の利用に比べ、休日の利用が圧倒的に多いことが分かった(図9)。しかし利用者同士の交流は平日の方が起こりやすいようである。人数が少ないため、話しかけやすいことや高齢者の利用が多いことが理由として考えられる。

座席利用について、利用件数の総計を、利用場所別に図11に示す子どもは大人数で利用できる席や入口や本棚からの道のりが近い席を選んでいる傾向にある。大人は曜日によって利用が変化する(図9)。平日は子どもの遊びの付き添いのほか、パソコン等の作業や勉強に利用するケースも多く、利用時間が長くなっている(図12、表1)。在宅勤務の気分転換場所等として利用しているのではないかと考えられる。休日は子どもの付き添いがほとんどで滞在時間が子どもと同じくらい短い(表1)。大人の座席選択傾向としては、子どもが座っているところに座る傾

向や端の席を選ぶ傾向にある。高齢者は平日の方がどちらかというと利用が多い(図9)。滞在時間がとても長く(表1)、その場であった人と会話を楽しんでいる(図12)。この空間を交流の場として最もよく利用している世代であった。連日同じ時間に来場して出会うコミュニティも形成されており、テラス席をほぼ毎日利用していた(図11)。高齢者は天気が一番左右される世代でもあり、雨が降っている日の高齢者の利用は10%未満に落ちている。知らない人と話す人は高齢者が多い。

利用座席の状況を見ると丸テーブル、テラス席の利用が多い(図11)。丸テーブルは本棚に近く、おもちゃや本を取り、一番近くの席に座るケースをよく見かけた。また一番広い席でもあり、幅広い世代から人気であるように感じた。テラス席は外で遊ぶ子供達の休憩場所としての利用や高齢者グループのお決まりの場所となっており、利用者が多い。入り口から近い席は入れ替えが多いために、利用者数が多いという結果に繋がったものと考えられる一方、入り口からは遠く、かつ端の席も大人を中心に利用頻度が高い。奥テラス席は半屋外のスペースでかなりこじんまりしたスペースであるため、飲食や勉強など長時間の利用が多かった。

横ならびの中央の席は、一人できた人が利用する様子はあまり見られず、連れがいる人が利用している印象であった。座席によって利用行動も多少異なり、テラス席は高齢者グループが利用するため会話の利用が多い。それ以外は遊びの利用が多いが、パソコンやタブレットを使用する人は入口から遠い席を利用するようである。当然ゲームやパソコン等の作業をする人は長時間の利用となる場合が多い。

利用方法では、公園であるため当然だが、遊びの利用が圧倒的に一番多いが、ついで多い利用が会話であった。高齢者を中心に交流の場になっていることがわかる。また飲食、パソコン作業、読み物書き物など、各々が自由に使える場所として定着している。

滞在時間が長い方が、交流が多いことも分かった。地元の人がよく利用する場所であるため、合流や知り合いに会うことは多いが知らない人との会話はとても少なかった。新たな交流関係構築の場にはなっているとは言えないが、長い時間をかけることで、高齢者のコミュニティのように交友関係が広がる場になる。

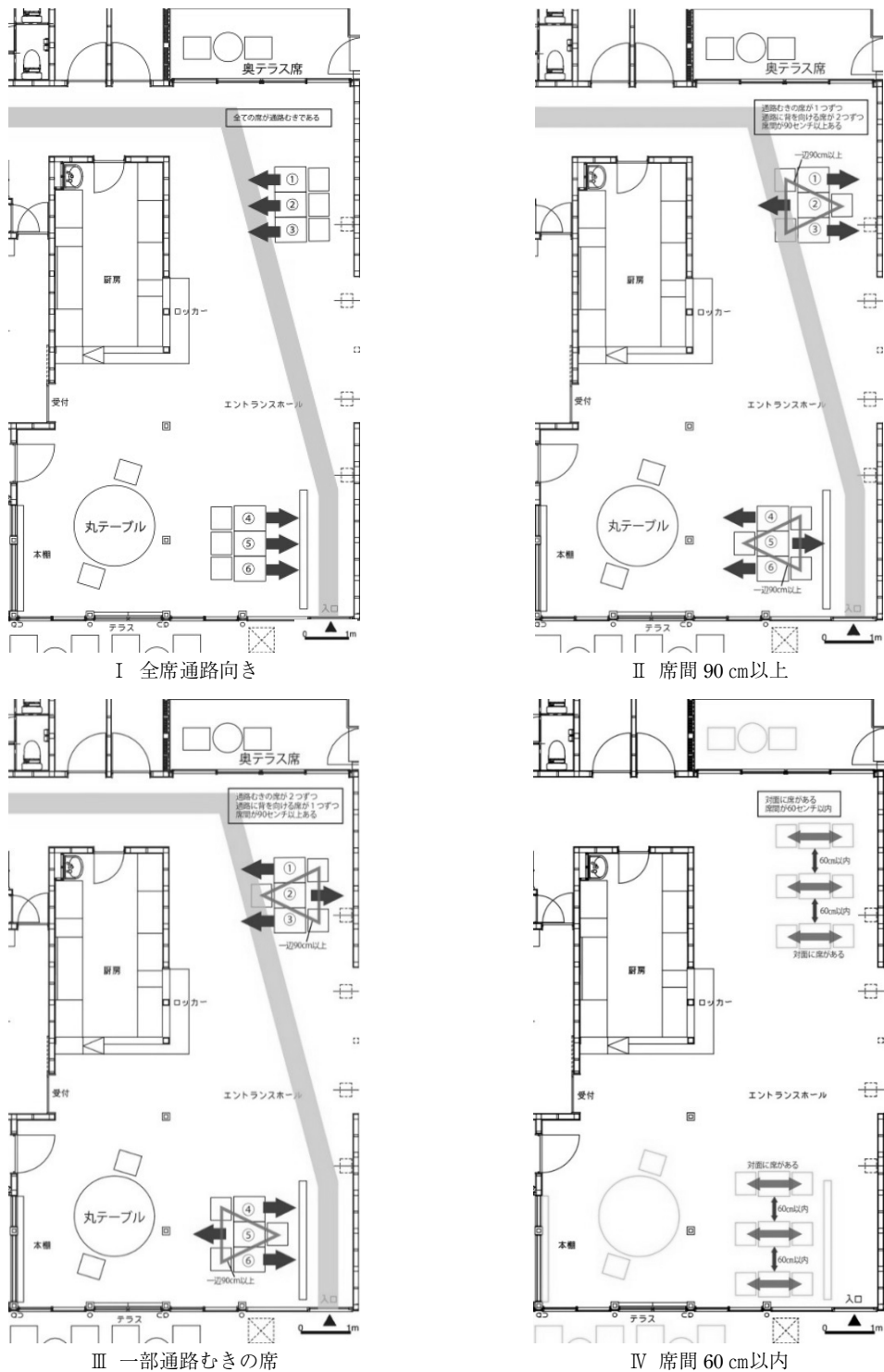


図7 レイアウト変更案について

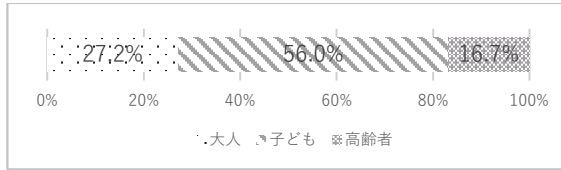


図8 利用者内訳 n=1410

表1 世代別滞在時間

| 平均滞在時間 | 平日 | 休日 |
|--------|---------|---------|
| 大人 | 0:49:20 | 0:27:30 |
| 子ども | 0:27:29 | 0:32:58 |
| 高齢者 | 1:01:19 | 1:05:27 |

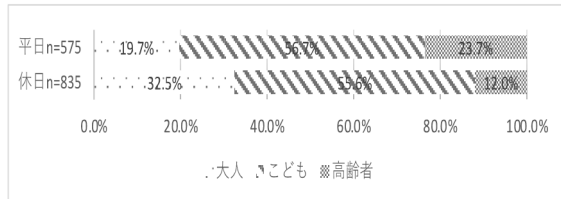


図9 曜日別利用者内訳

表2 レイアウト別平均滞在時間

| レイアウト案 | 滞在時間 |
|--------|--------|
| 既設 | 32分16分 |
| I | 31分21秒 |
| II | 37分6秒 |
| III | 39分56秒 |
| IV | 43分40秒 |

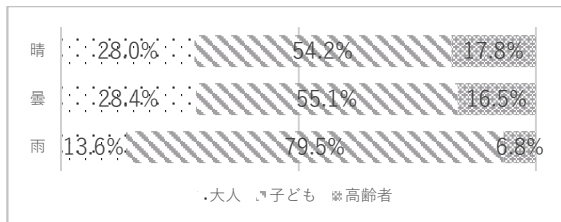


図10 天気別利用者内訳

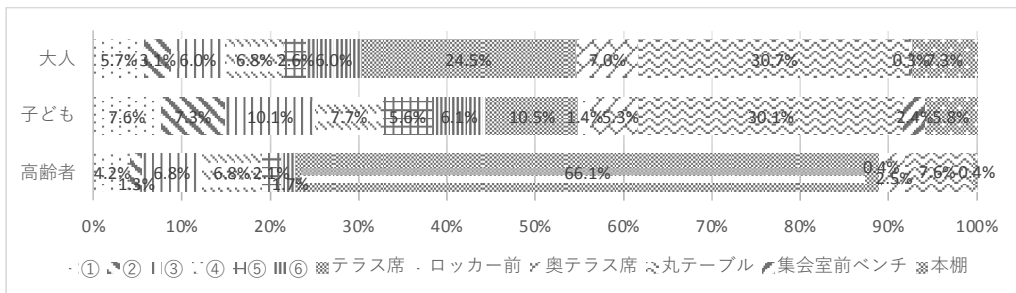


図11 世代別座席利用状況

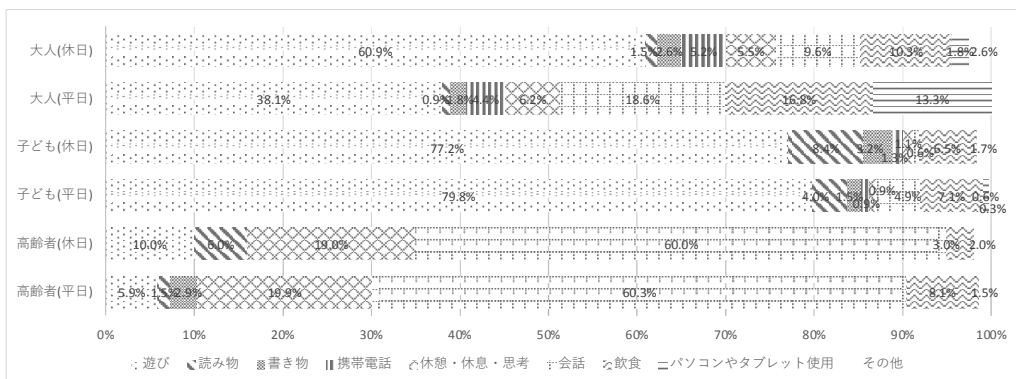


図12 世代別利用行為

表3 レイアウト別の様子

| レイアウト | 連れ | | 合流 | | 知り合いにあったか | | 知らない人との会話 | |
|-------|--------|--------|--------|--------|-----------|--------|-----------|--------|
| | 有 | 無 | 有 | 無 | 会った | 会わない | 有 | 無 |
| I | 72.40% | 27.60% | 17.30% | 82.70% | 18.90% | 81.10% | 2.60% | 97.40% |
| II | 69.60% | 30.40% | 39.70% | 60.30% | 39.70% | 60.30% | 3.40% | 96.60% |
| III | 81.50% | 18.50% | 39.90% | 60.10% | 41.30% | 58.70% | 6.20% | 93.80% |
| IV | 81.10% | 18.90% | 33.80% | 66.20% | 32.40% | 67.60% | 3.30% | 96.70% |
| 元 | 80.20% | 19.80% | 16.40% | 83.60% | 11.60% | 88.40% | 2.60% | 97.40% |

座席レイアウトウイ4案比較するとⅢのレイアウトが、一番平均滞在時間が長い(表2)。また表3からも、一番交流が多いといえるのではないだろうか。滞在時間が長くなるように席間が90センチ以上になっており、知り合いを見つけやすいように通路を向いている席も多い。テーブルがつながっているため、話しかけやすい。以上のような特徴がある。

5 座席利用の意向

観察状況の裏付け詳細な利用状況の把握と利用状況の傾向の根拠や理由の裏付けを目的にヒアリング調査をおこなった。合計36名にヒアリングを行い、8名の子ども、23名の大人、5名の高齢者に実施した。

利用者の9割近くが2回以上利用し、利用頻度は(図13)半数以上が1週間に1度は利用しており、9割近くの人が1ヶ月に1回は利用していた。近隣住民を中心に、日常的にコンスタントに利用されている空間となっていることが確かめられた知り合いに会う頻度を確かめたところ、図15に示す通り、毎回誰かに会うという回答が4割を占め、日常的に知

人と会うための場となっている高い。当該座席を選択した理由をきくと端の席や周りが空いている席を好む傾向が分かった。子どもは特に意識的に着座場所を選ぶ回答は少なかった。また付き添いの大人は子どもが遊んでいるところに近いなど子ども基準で選んでいる。

利用目的の回答は遊びが一番多いが、飲食、読書、勉強、おしゃべりや集まりなどバラエティに富んでいた(図14)。観察者による実際の利用状況の結果でも、遊びの次に、休憩・休息・思考が多く、その後は読み物、携帯電話の使用、会話、飲食がほぼ同じくらいの利用であった。綺麗で施設が整っていることを利点に感じ利用している人が多いことも分かった。ただやはり新たに知り合いができた人はとても少ない(図16)。しかし、知り合いができたという人の様子から考察すると、ペットなど会話のきっかけになる仕組みがあることで新たな会話に繋がると考えられる。また保育園、学校、習い事など別のコミュニティで顔見知りになった人と公園で出会ったことで会話を始めたという回答もあり、地元の人が集まる場所ならではの新たな交流もあるようだ。

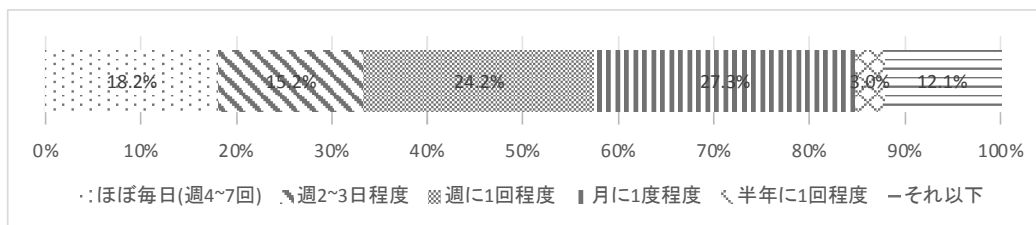


図13 利用頻度

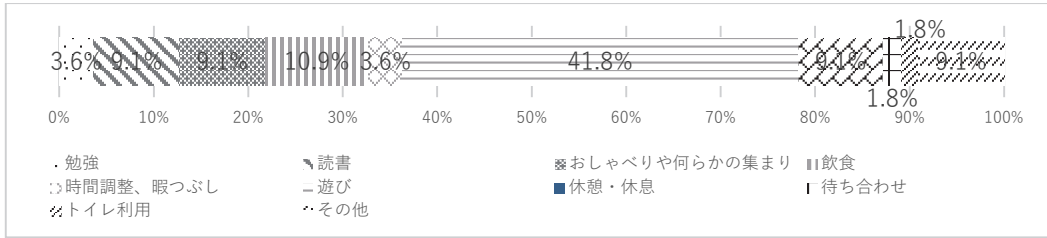


図 14 利用目的

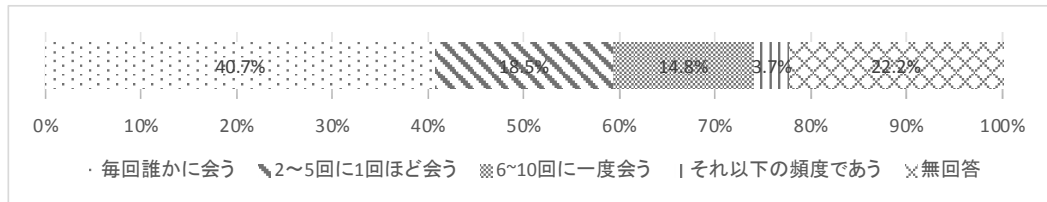


図 15 知り合いに会う頻度

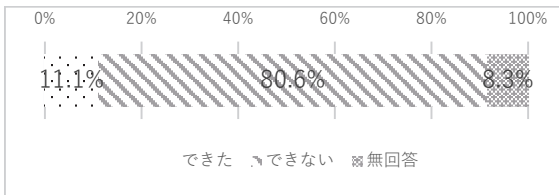


図 16 新たな知り合いができたか

6 まとめ

本研究では観察調査とヒアリング調査から利用状況や交流の様子を分析し、丘の上テラスの使われ方やサードプレイスの必要性を考えた。

世代別に見ると子供の大半は遊んでいるが、勉強や読書をする子も多い。公園での待ち合わせや公園で出会い一緒に遊ぶ様子もよく見かけた。また丸テーブルの利用頻度が高く、無意識に広い席を好む傾向があるが、子供の平均滞在時間は曜日によらず30分程で、短時間の利用が多い。大人の平日の利用は子供の遊びの付き添いの他、パソコン等の作業が多かった。平均滞在時間も49分と長い。休日は子供の付き添いが大半で、滞在時間も27分と子供同様短い。親同士の知り合いが多く、合流や知り合いに会う様子も度々見られた。座席選択傾向として子ども基準で選ぶか、人と距離を置ける席を選ぶ傾向がある。高齢者は平均滞在時間が1時間以上と他世代に比べ、曜日に関係なく長い。しかし天気によって利用者数が大きく変化し、天気が悪いと利用者数が大幅に減る。利用座席はテラス席が圧倒的に

多く、“お決まりの場所”となっている。その他入口から近い席を利用することが多いようである。会話をしている人が多くコミュニケーションを求めている事が顕著にわかる。知らない人との会話も多く、高齢者と若者が話している様子も度々見られた。

利用座席の状況を見るとおもちゃのある本棚から近く、広い丸テーブル、外で遊ぶ子どもの休憩や高齢者グループのお決まりの席であるテラス席の利用が多いことがわかる。その他個人での作業利用なのか、グループ利用なのかで座席利用選択や滞在時間が変わることがわかった。

交流の様子を見ると新たな知り合いができたケースは非常に少ない。新たな交流にはなにかきっかけになる仕掛けが必要だと考える。実際子どもがおもちゃを遊んでいるところから親同士の会話に繋がっているケースを複数見かけた。気軽に人と共有したくなるものや、敢えて少し使い方が難しいものを用意することで、会話が生まれる可能性があると考えられる。

しかし、合流や知り合いに会う人が多いことから、地元の人によく使われている“地元の人の溜まり場”であることは確認できる。ヒアリングでも「知り合いに会ったことがない」という人の方が圧倒的に少なかった。利用頻度も週に1回以上きている人が半数近くおり、サードプレイスとして定着していると言えるだろう。新たなコミュニティは生まれなくても、知り合いに遭遇することが多い。知り合いを見

つけやすい入口から近い席の方が、交流が起こりやすいようである。

また滞在時間が長い方が、交流があると言える。滞在時間が長い方が、知り合いに会う確率が高く、合流していることが多い。また知らない人との会話も多い。

当然だが、会話を目的でくる人の方が交流することが多い。アンケートからもおしゃべりを目的にくる人も多く、コミュニケーションの場として定着していると言える。

丘の上テラスは雑司ヶ谷地域の人に繰り返し使われている、地域の人が気軽に集まれる場所である事がわかった。災害への備えとして設けられた公園でありながらも、木造密集市街地内の細街路に囲まれた地区にあり、近くにある「としまみどりの防災公園 (IKE-SUNPARK)」とは異なり特に高齢者を中心にコミュニティの場になっていることも確認できる。子どもやその親の世代も知り合いに会うケースが多いほか待ち合わせをして利用しているケースも多い。子どもや高齢者に関してはその日來ることができるとても自由な関係性である。その利用方法から公園がサードプレイスとして定着している事が確認できた。

今回の調査では、レイアウトⅢ(図7)が一番交流の多いレイアウトであると確認できた。人と人との距離を座席占有時間が長くなると言われている 90センチにしている、テーブルを繋げ相席状態を作る、通路向きの席が多いことなどが挙げられる。

今回の研究を通し、サードプレイスの必要性とサードプレイスにおいて、交流を促進する座席レイアウト提案した。しかし今回はコロナ禍であったものあり、制限が多く今後より詳細かつ多くのデータ

を集めることで、より効果の高い設えが提案できるだろう。それにより、地域コミュニティが活性化され、温かい繋がりのある街が増えていくことを期待する。

参考文献

1. 久隆浩, 地域における交流の場の意義と効果に関する研究 —北里地域交流会を事例として, 2017
2. 橋戸志織, 喫茶店に生起するコミュニケーションの特性に関する研究 —滋賀県を対象に一, 2012
3. 青木詩織, 伊藤汐美, カフェ内のテーブル配置が一人客の居心地に与える影響に関する研究, 人間・環境学会誌, 17 巻 1 号, 2014
4. 出口裕大, 横山広充, 宮岸幸正, 喫茶店店舗の空間構成と利用客に関する研究, 日本建築学会大学学術講演梗概集, pp781-782, 2013
5. 岩波宏佳, 山田あすか, 都市の中の滞在空間に関する研究 —東京都足立区内カフェを対象として一, 2019
6. 大分大学福祉科学センターコミュニティカフェの実態に関する調査結果 [概要版], 2011.7
7. 国土交通省都市局公園緑地・景観課, 平成 26 年度 都市公園利用実態調査報告書(抄), 2015/3
8. 総務省統計局, 人口推計 (令和 3 年 (2021 年) 7 月確定値, 令和 3 年 (2021 年) 12 月概算値), {2021-12-20}, 2021-01-10, <https://www.stat.go.jp/data/jinsui/new.html>
9. 豊島区, 住民基本台帳による年齢別人口, (令和 3 年 10 月 1 日現在), 2021-12-10, <https://www.city.toshima.lg.jp/070/kuse/gaiyo/jinko/023949.html>

